

展望

わたしだけの「ふるさと」

大西 淳子

人はいさ心も知らずふるさととは花ぞ昔の
香にはほひける 紀貫之

『古今和歌集』の一首。ここから千年以上の
時が流れ、梅の香は変わらないが、見える
風景、音、町の匂いは変わった。それでも、
一人一人に「ふるさと」はある。現代、ふる
さとは、どう詠まれているのだろうか。

店灯りのやうに色づく枇杷の実の、ここ
も誰かのふるさとである

山下翔 『温泉』

長崎の坂をよろこぶわが脚よあるいたと
ころがふるさとなる

まず一首目で注目したいのが語順である。

枇杷の実のような店灯りであれば、あたたか
く懐かしい灯りを想像するが、この歌は逆で
ある。店灯りのような枇杷の実は、無機物の
ような有機物、分かりやすく例えば「ガラ
スのような花」であるから、作り物のようで、
どこか嘘つぽく、商業的である。そんな場所
でも、誰かのふるさとなのだ。

山下は福岡在住だが、精霊流しの歌などあ
り、長崎にルーツがあるようだ。二首目は坂

の多い長崎の地形を、脚で捉えている。普通
なら悲鳴をあげそうだが、足裏で大地を味わ
い、しかと脚に覚えさせている。本歌集の標
題紙裏には、斎藤茂吉の「山道をゆけばなつ
かし真夏さへ冷たき谷の道はなつかし」を記
し、リスベクトしていることが分かる。

お母さんきゃらぶきだけで充分よたまに
は呑もうホテルがいるよ

高橋千恵 『ホテルがいるよ』

如意寺から六つ目の鐘鳴り渡り『山谷
集』に葉を挟む

高橋は、上京し働いているが、群馬県の月
夜野に実家がある。一首目は帰省した娘に、
母がせっせと世話を焼いている場面だろう。

庭にホテルが来たので、一緒に呑もうと誘っ
ている。母とのなげない会話だが、ホテル
の明滅が、かけがえのない一時であると思わ
せる。高橋は、一コマ漫画の吹き出しのよう
な歌が多い。これを三枝昂之は「吹き出し短
歌」と名付けた。新しいスタイルだ。

高橋は、三枝が講師を務める群馬県立土屋
文明記念文学館の短歌講座で学び始めた。二

首目は、文明の歌集を読みつつ実家で年を越
す場面。除夜の鐘は、六つ目と数えられるほ
ど、クリアに聞こえるようだ。一旦本は閉じ、
ふるさとの鐘の音を深く味わっている。

雪の上に雪がまた降る 東北といふ一枚
のおほきな葉書

工藤玲音 『水中で口笛』

もつつもつつゆぎふつてらじゃだどもみ
ちでらでらつてでおつかねへでな

工藤は、石川啄木と同じ盛岡市浪民出身。

学校では「啄木かるた」の行事があり、ずつ
と身近な存在だった彼の享年（二六）に追いつ
いた時、命日までに歌集を出そうと決めた
そう。歌集おわりに、啄木の本名、石川一
へ捧げると記している。そんな工藤は、東北
の風土をしっかりと自分のものにしていく。

一首目。雪のリフレインが、静かに降り続
く様子を表現しており、また「一枚のおほき
な葉書」という景の捉え方が、ゆつたりとし
て、柔軟かつ雄大である。

工藤は方言を活かした歌が多い。二首目は、
すべてひらがな表記で、言葉の柔らかさが感
じられる。詞書もないが、説明なしに音とリ
ズムで感覚的に味わうことができる。

どんな場所も、ふるさととはふるさと。わた
しだけの「ふるさと」を詠みたいものだ。